

学 位 論 文 題 名

和牛子牛の市場構造と産地対応に関する実証的研究

－和牛改良の進展を視点として－

学位論文内容の要旨

第二次大戦後、日本における肉牛生産は和牛を中心にスタートした。しかし、牛肉需要が顕著に増加し始めた高度経済成長期を転機に、肉牛生産の中心は和牛から乳用種に大きくシフトし、その後の和牛生産はむしろ停滞していた。1980年頃までの牛肉供給の増加は、主として乳用種の国内生産と輸入の増大によって支えられてきたのである。

だが、牛肉自由化を契機に再び和牛が注目され始めている。和牛は、肉質的に乳用種牛肉はもとより輸入牛肉よりも優れ、輸入牛肉に対して一定の優位性を確保できると考えられるからである。しかし、和牛生産では、一般に繁殖地帯と肥育地帯とが分離しており、枝肉価格の変動は素牛価格のそれを通じて、繁殖経営に影響を与える。そのため、今後の日本における和牛生産の発展を展望する時、和牛子牛産地がいかなる生産構造の構築と市場対応を行うのかが重要な課題となる。本研究では、日本における和牛子牛の市場構造を明らかにするとともに、子牛産地の市場対応の実態を、品種改良に視点をおきながら分析し、合わせて子牛産地における今後の市場対応の方向性を示唆することを目的としている。

まず第1章では、1960年代以降の和牛生産の変化を整理した上で、和牛生産を進める上で大きな問題となる子牛供給の動向について分析した。その中でとくに注目すべき事実は、子牛生産が次第に九州、東北に集中してきたこと、また近年では、九州、東北の子牛生産においても、繁殖雌牛が減少するなど、不安定的な様相を示し始めていることである。

第2章では、和牛子牛の市場構造および子牛の価格形成の特徴について考察した。和牛子牛市場では、家畜市場間の価格差が非常に大きい。その背景として、高級和牛肉嗜好という日本の文化的特徴とともに、和牛改良における地域格差の存在を指摘できる。とくに産地が優良種雄牛、優良「血統」精液を確保しているかどうか、決定的な意味合いをもっている。こうしたことを根拠に、1980年代に市場の序列化が進み、上位序列の市場と下位市場とは交差しないという市場の分断化がみられるようになった。新興産地は、この結果生まれる不利な立場を克服するために、優良精液の確保に躍起になっているが、既存利益を守ろうとする諸産地は和牛改良を閉鎖的に進めており、優良精液の確保には大きな壁があるのが現状である。

第3章では、先発産地・岩手県胆江地区を事例に、産地形成及び市場対応における和牛改良の役割とそれをめぐる諸問題を明らかにした。胆江地区では、いち早く但馬牛の種雄牛を導入し、高級和牛産地の形成に成功したものの、近年の経済不況によって高級枝肉価格が低下し、子牛生産にも影響を与えている。このことは、一面的な高級化追求路線への

反省を迫るものである。

第4章では、同じく先発産地に属する岐阜県飛騨地区を対象に、産地形成及び市場対応における和牛改良の役割とそれをめぐる諸問題を明らかにした。飛騨地区では経済成長にともなう牛肉消費の増加を背景に、但馬牛の生産をいち早く行い、子牛の他県移出と高価格を実現してきた。しかし、1980年代以降、市況が低迷する中で、高価格追求路線は転換を迫られている。本章では、酪農家・肥育農家・繁殖農家が連携して和牛改良を行っている岐阜県清見村の事例を分析し、転換の具体的方向に接近した。

第5章では、岩手県胆江地区や岐阜県飛騨地区などの先発産地に肥育素牛を供給している、北海道の子牛生産の現状、産地の流通構造などを分析した。北海道の和牛子牛生産は急速に増加し、子牛の大移出産地に成長してきた。北海道の子牛流通はこれまで地域市場を中心に展開してきたが、移出の増加や系統農協主導の地域家畜市場の整備にともない、白老家畜市場、十勝地区家畜市場、美幌家畜市場の3市場に取引が集中してきている。しかし、導入する和牛の基準が地域あるいは農家によって異なっていること、優良精液がなかなか確保できないこと、あるいは地域市場での道外買参人の力が強いことなどを背景に、形成される価格は低い水準に止まっている。それを打開するには、全道統一的な和牛改良の進展が必要である。

第6章では、近年急速に全国のトップ産地に躍り出た宮崎県を事例に、広域的産地形成の過程を分析し、その物的基盤が種雄牛、すなわち精液の共同利用にあることを明らかにした。宮崎県では、種雄牛の生産地域の既得権を認めながら、その精液を県内で共同利用し、他地域でも優良種雄牛の生産が可能となる体制を整えている。その結果、県内で選抜された種雄牛は49頭にも上り、その多くが資質・体型兼備の種雄牛となっている。こうした努力が同県産子牛の高価格に結びついているのである。

終章では、これまでの各章の要約と総括を行ったうえで、日本における和牛生産の今後の方向について考察し、提言を行った。

本論文を総括すれば次のように言える。第一に、各々の子牛家畜市場は、例えば価格上位の市場は高級和牛肉の肥育産地および繁殖産地に結びつき、中位・低位の市場は中位・低位和牛肉の肥育産地および繁殖産地に結びつくなど、市場の序列化と分断化が進行している。それらの基礎には血統重視の子牛評価があり、優良血統種雄牛・精液などを十分に確保できない新興・後進産地は、価格形成上、不利な立場に立たされる。そのため、勢い伝統・先発産地からの種雄牛・繁殖素牛の導入を強られる。北海道はそうした新興産地の典型といえる。第二に、優位な価格を実現している産地といえども、その優位性は優良血統の種雄牛・精液を確保している期間に限られることである。それだけに各産地とも優良血統種雄牛などの作出に多大な努力を払っているが、その取り組みは閉鎖的で費用も膨大なものになる。その点では、特定の産地を育種組合として認定し、集中的に資金を供給することによって、閉鎖的な家畜改良を進め、地域独自の種雄牛を作出するよう誘導してきた国の責任も大きい。

しかし、今後の方向を展望するならば、バブル崩壊後の不況の長期化を契機に、高級肉生産を目指したこれまでの高品質子牛の閉鎖的育種体制は大きな反省を迫られている。そうした中で、平準化事業を通じて和牛改良を開放的に進めようとしている(社)家畜改良事業団の活動は大いに注目される。事業団が多くの種雄牛を保有し、全国的に精液を供給していくことになれば、諸産地は繁殖雌牛の状況を斟酌して子牛生産を行っていくことが

可能になり、費用も大きく削減されるものと思われる。また、市場対応も高級化一本やりだけでなく、多様な道が開かれることであろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 三 島 徳 三
副 査 教 授 出 村 克 彦
副 査 助 教 授 飯 澤 理 一 郎

学 位 論 文 題 名

和牛子牛の市場構造と産地対応に関する実証的研究

－和牛改良の進展を視点として－

本論文は、表43、図45を含む総頁数163頁の和文論文であり、他に参考論文6編が添えられている。

本論文は、日本における和牛子牛の市場構造を把握するとともに、子牛産地の市場対応の実態と今後の方向について、品種改良の進展を視点に分析することを課題としている。

まず第1章では、1960年代以降の和牛生産の変化を整理した上で、和牛生産を進める上でネックとなっている子牛の供給動向について地域別に解明した。

第2章では、和牛子牛の市場構造および子牛の価格形成の特徴について考察した。和牛の子牛市場では、家畜市場間の価格差が非常に大きい。その背景として、高級和牛肉嗜好という日本の消費特性とともに、和牛改良における地域格差の存在を指摘できる。とくに産地が優良種雄牛、優良「血統」精液を確保しているかどうかが決定的である。こうしたことを根拠に、1980年代に市場の序列化が進み、上位序列の市場と下位市場とが交差しないという市場の分断化がみられるようになった。新興産地は、この結果生まれる不利な立場を克服するために、優良精液の確保に努めているが、既存産地では利益擁護の立場から和牛改良を閉鎖的に進めており、優良精液の確保に大きな壁があるのが現状である。

第3章では、先発産地・岩手県胆江地区を事例に、和牛子牛の産地形成および市場対応における和牛改良の役割等について分析した。その結果、胆江地区では、いち早く但馬牛の種雄牛を導入し、高級和牛産地の形成に成功したものの、近年の経済不況によって高級枝肉価格が低下し、子牛生産にも影響を与えていることが明らかになった。

第4章では、同じく先発産地に属する岐阜県飛騨地区を対象に、和牛子牛の産地形成および市場対応における和牛改良の役割等について明らかにした。同地区では経済成長とともに牛肉消費の増加を背景に、但馬牛の生産をいち早く進め、子牛の他県移出と高価格を実現してきたが、1980年代以降の市況低迷の中で高価格追求路線の転換が迫られている。

第5章では、上述の岩手県胆江地区や岐阜県飛騨地区などに肥育素牛を供給している、北海道を対象に、そこにおける子牛生産の現状、および産地の流通構造などを分析した。北海道の和牛子牛生産は近年急速に増加し、子牛の大移出産地に発展してきた。北海道の子牛流通はこれまで地域市場を中心に展開してきたが、道外移出の増加や系統農協による地域家畜市場の整備に伴い、白老、十勝地区、美幌の3家畜市場に取引が集中してきている。しかし、導入和牛の地域・農家による相違、優良精液の確保難、あるいは地域市場での道外買参人の取引力の高さなどが原因となって、形成価格は低位水準に止まっている。それを打開するには、全道統一的な和牛改良の進展が必要である。

第6章では、近年急速に成長し、いまでは全国のトップ産地に躍り出た宮崎県を事例に、広域的産地形成の過程を分析した。宮崎県では、種雄牛の生産地域における既得権を認めつつも、その精液については県内で共同利用し、県内全域において優良種雄牛の生産を目指す体制を構築した。こうした共同の取り組みが、多数の優良県産種雄牛の生産と同県産子牛の高価格に結びついていることが明らかになった。

終章では、これまでの各章の要約と総括を行ったうえで、日本における和牛生産の今後の方向について考察し、提言を行っている。

本論文では、第一に各々の子牛家畜市場では、例えば価格上位の市場が高級和牛肉の肥育産地および繁殖産地に結びつき、価格の中位または低位の市場が中・低位の和牛肉の肥育産地および繁殖産地に結びつくなど、市場の序列化と分断化が進行していることが明らかになった。それらの基礎には血統重視の子牛評価があり、優良血統種雄牛・精液などを十分に確保できない新興・後進産地では、価格形成上、不利な立場に立たされる実態がある。そのため、勢い伝統・先発産地からの種雄牛・繁殖素牛の導入を強いられるのである。北海道はそうした新興産地の典型といえる。第二に、優位な価格を実現している産地であっても、その優位性は優良血統の種雄牛または精液を確保している期間に限られることが明らかになった。各産地では優良血統種雄牛などの作出に多大な努力を払っているが、その取り組みは閉鎖的で費用も膨大なものになる。そのため、これまでの高級肉生産を目指した高品質子牛の閉鎖的育種体制は転換を迫られており、その動きはバブル崩壊後の不況を契機に、和牛改良事業と産地に浸透しつつあることを指摘し、本論を結んでいる。

以上のように、本論文は、研究のブラック・ボックスとなっている和牛子牛の市場構造と産地対応について、全国縦断的な調査に基づく実態把握を行い、多くの新知見を得ている。これは肉牛市場論の進展に寄与するのみならず、政策的にも貴重な提言となっている。よって審査員一同は、柳京熙が博士（農学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認めた。